



「子どもの発達」問題 その2「愛着」（アタッチメント）形成

ノンフィクション作家の柳田邦男氏は、「壊れる日本人」（新潮社）の中で、平成16年（2004年）に長崎県佐世保市で起きた小学生による同級生殺害事件を取り上げています。それによれば、事件を起こしたK子は、幼児期における母親の「愛着」の欠落が決定的なストレスとなり、子どもらしい自然な感情を心の奥に押し込めてしまう「抑圧」という反応が習慣化し、他者の考えや感情に共感したり他者と親密な関係をつくる力が育っていなかったところに、様々な要因（ホラー小説や映画への傾倒、バーチャルな世界と現実との区別の不分明など）が加わって、殺害に至ったと分析しています。

そして、柳田氏は、これは特異な問題と考えるのではなく、根本に豊かで便利になった現代社会の問題があることを指摘しています。すなわち、適度な「愛着」形成ができない現代社会の問題が詳しく述べられ、ケータイ・ネット社会の負の側面が様々な実例とともに描かれています。

母親が、他事に注意をそらすことなく、愛情をもって赤ちゃんに接する心の動きが「愛着」形成の重要なポイントですが、授乳ですらテレビや携帯を見ながら行う母親の何と多いことか。赤ちゃんは、新生児の早期の段階から、すでにアイコンタクトを始めているにもかかわらず、母親はそれに応えていない。現代社会は、本人の気付かないまま、「子どもの発達」問題を生じさせています。

（玉井）

